

# 別府女子専門学校における読書調査について

吉岡 義信

## はじめに

『別府女専新聞』（以下『新聞』とする）の第3号（1947年11月）と第11号（1948年10月）に、女子専門学校生を対象とした読書調査の結果が掲載されている。戦後混乱期におけるインフレーションによる経済危機、食糧問題等の中で学生たちもアルバイトに専念せざるを得ない状況であったことが同新聞の他の記事からも覗える。このような状況の中で当時の読書環境がどのようなものであったか推測の域を出ないが、この読書調査は別府という地域的制約はあるものの、女子学生の読書傾向を知ることのできる数少ない資料であろう。なお、文中における旧漢字は新漢字に、誤字、送り仮名等はそのままに、判読しにくい文字は□で表示した。

## 大分での図書の販売状況

『新聞』第2号（1947年8月）に「炎暑の街にアルバイト二景」という見出しの記事が掲載されており、この中で大分駅構内の売店での様子が以下のように描かれている。

（前略）お客の好む小説とか作家もおぼろげ乍ら判って来た様に思ふ。駅構内の売店の為め、とかく車中で時間つぶしに読む程度の軽いものが溢れる。オール日本、モダン日本、単行本としては、何よりやくざ物が売行がよい。特に佐々木味津三の右門捕物帖等は、評判がよく次々に補給しても、すぐ品切れである。子供のものとしては、仲々良心的な童話集があるが、これは少しも売れない。つまらない、薄っぺらな“さいゆうき”の漫画等が、どしどしさばけるのはどうした事であらうか。ここにも社会の暗い一面が現はれて居る。美しい表紙の小公子を嫌ひ、髑髏の画のついた海賊船の漫画を喜ぶ子供達に、一日も早く健全な読物を読んでもらひたいと希ってやまない。

（中略）ここ大分駅の正面左側に七月二十一日より始められたこの□□、織田作之助の夜の構図、平凡等新刊本二千冊あまりも並べられている。一日の売上げ一千元から二千元程度でその一割が彼女らの収入といふわけ。

駅構内の売店という条件もあるであろうが、いわゆる文学書といったたぐいのものは好まれない傾向にあったようで、ある意味、当時の世相を反映しているのではないだろうか。このような状況の中で、女子学生の読書調査には興味を引かれるものがある。

## 別府女子専門学校の読書調査

まず第3号の調査には、「愛される文芸作家」という見出しで、以下のように掲載されている。

現代の様に書籍入手の困難な際にも学生の読書欲は愈々盛んなものがある。古本屋の軒下に、新本屋の人混みの中に佇んでいる学生、「此の頃は本が読めない様に出来ているんだ」と思はず口走る学生、一刻をも惜んであの混んだ電車の中で立読みしている学生、全てが深刻に感ぜられる。こうして読書しようとする努力は間断なく続けられて行く。人々の手を渡り歩く一冊の本のスピードの速さよ、不完全な設備とはいえ図書館へと急ぐ足も口くなくなった。さて、此の様に努力する学生は一体何んな本を好むのだろう。尤も文科を専攻する学生が文学的になるのは云ふ迄もないが、多くの文学書の中でも未だ読んで居ない小説のみ力は大きい。借し合う本も、岩波文庫の翻訳小説が多いだろう。それから明治文学、文学評論等で、古典は極く一部の人に限られ居ようである。多くの小説を手にして居る内に、必ずや自己を感動させ、更にその著書に共鳴しまふのは、読書する人の人情と云えるであろう。そしてその人の著作を読破するすることが更に進んで著者の思想を□□□索することが、如何に興味深いものであるか、敢えて云う必要もない。

一番愛する著者は個々人によって千差万別であるが、今、本校に新て各学年によって何等かの現象の現れることを予期し、極く少数の人員ではあったが一応調べて見ることとした。調査人員は八十二名（一年が四十一名、二年が四十一名）であった。両学年共に、仏文学。ロシア文学。独逸文学。英文学等。外国文学が有力であり、日本文学は一般に押され気味である。古典文学（日本）を愛するものが少ないと見えて、著者名も現在作家に限られている。一年は比較的日本の作家を上げたものが多く、特に島崎藤村。夏目漱石等多いのに反し、二年には一人も無いと云ふことなど興味深い。

外国の作家では、アンドレ・ジイドが群を抜いて居る。フランス文学が一位を占めて居り、次にロシア文学となって居る。英文学は僅かに沙翁一人に止まり、其の数も少いのが案外である。

今人々の愛する著者を知ることは、今の人々の思想を知る助けとなることと思ふ。今後多くの人々によって調査して行く内にこの現象は漸次変化するであろう。否変化しなければならないであろう。

この調査対象となった2年生、1年生の卒業時の人数はそれぞれ83名、53名となっており、仮に調査時点での学生数がこのままであったとすると、2年生で約48%、1年生で約77%の比率であったことになる。調査の分析結果にも示されているように、両学年共にアンドレ・ジイドが1位で、2位以下を大きく引き離している。2年生では上位10位までの中で日本人は芥川龍之介、吉田弦二郎だけで、外国人作家がほとんどを占めている。1年生では、2位の島崎藤村が目立ち、夏目漱石、国木田独歩、志賀直哉が10位以内に入っている。全体的に外国人作家が目立つのは、戦時中欧米のものが排除されていたという反動で

あろうか。ちなみにジイドはこの年ノーベル文学賞を受賞している。シェイクスピアが 2 年生の 2 位にあがっているが、シェイクスピアの作品については、文化祭の英語劇でも演じられおり、授業との関連もあるのかもしれない。いずれにしても、作品名が無いのが残念である。

調査結果の表が以下のように掲載されている。なお文字の判読しにくい箇所は、二学年では吉田弦二郎、武者小路実篤、夏目漱石、倉田百三、一学年では森鷗外である。

二 学 年				一 学 年			
アンドレ・ジイド	朝	英	6	アンドレ・ジイド	朝	日	7
シェイクスピア	朝	英	3	島崎藤村	日	独	4
モーパッサン	朝	独	2	ゲーテ	日	独	3
ゲーテ	朝	独	2	マーガレット・ミツチエル	米	独	3
ドフトエフスキー	ロシア	独	2	夏目漱石	日	日	3
ヘンリー・ジェームズ	米	独	2	パール・バック	米	独	2
ツルゲーネフ	ロシア	独	2	モーパッサン	朝	独	2
芥川龍之介	日	独	2	スタンダール	朝	独	2
吉田弦二郎	日	独	2	野木田独歩	日	日	2
ジャン・ポール・サルトル	朝	独	1	志賀重成	日	日	2
トルストイ	ロシア	独	1	ゴリキー	ロシア	独	1
ロマニ・ローテン	朝	独	1	フローベル	朝	独	1
バルザック	朝	独	1	ドフトエフスキー	ロシア	独	1
チエホフ	ロシア	独	1	ヘルマン・ヘッセ	朝	独	1
武者小路実篤	日	独	1	シェクスピア	朝	独	1
樋口一葉	日	独	1	森鷗外	日	独	1
樋口一葉	日	独	1	森鷗外	日	独	1
夏目漱石	日	独	1	森鷗外	日	独	1
倉田百三	日	独	1	森鷗外	日	独	1
倉田百三	日	独	1	森鷗外	日	独	1
北ノ地	日	独	7	森鷗外	日	独	2

約一年後の第 11 号にも読書調査が掲載されている。学年は 2 年生と 3 年生となっており、第 3 号の調査から一学年上っていることになる。もちろん同じ学生を対象としているかどうかは不明であるが、今回は作家名と共に作品名も記されている。また人数も 40 名とほぼ前回と変わらない人数であり、両者を比較することで何らかの傾向が見えてくるかもしれない。以下、全文を掲載する。

#### 読書調査 戦後文壇に太宰治 人間性への苦悶 学生思想動向

学生と読書は、つきもので、専門書は、その専門の必要に応じて色々読まれるが、一般的に、どんな学生でも読むという本は、文学書であり、その読書傾向如何により、思想も覗われることは通例とされている。

経済的な書籍入手困難より、一時的、エログロ営利主義的出版のため、良書の出廻りがあまり好く行はれていなかったため、読者を悩ませていたが、物価改訂と共に、一昨年より、高価ではあるが、相当量、数々の文学書が、各社をこぞって、重版、再版共に出版される様になった。特に目立つのは、雑誌の多種多様性である。価格の安

い面からも利用価値が多いらしく、短口的常識を得るにも好都合で、安易に入手せられる傾向であり、文学書中の小説などは、やはり、貸借関係に於て読まれてる模様であり如何に現今の学生が、経済的にしばられているかが、案ぜられる。

このことはさておき、試験もすみ、学生は、秋の夜長を、読書にもとめるは当然のことであらう。故に、本号には読書調査を掲載することにした。調査人員は二年、三年各四〇名づつ八十名であり全員ではないが、概略はこれでつかめると思ふ。

調査の結果、二年、三年の比較対照は、先ず置き、三年においてドストエフスキーの罪と罰が群を抜き、次に、トルストイの復活、アンナ・カレーニナ、そして日本に於ては一躍、有島武郎の小さきものへ、宣言が、あげられたのは大きな思想的変遷を注意しなければならない。そして更に、戦後文壇で愛好する作家として、太宰治が俄然トップに、しかも、人間失格なる作品が感銘を与へたといふことは、何か、人間そのものをじつとみつめる。自己開拓的思想が支配していることが窺はれる。尚、芥川や、有島を、尊敬し、そして太宰を愛好するという二重のつながりは、理路整然として、やはり、三年という学生を偲ばせる・

二年生に於ては、ゲーテ等があげられているのに、悩める年頃を物語っており、トルストイの復活が、三年と同様にあげられたのは注目すべきである。

戦後文壇に於て、太宰と並んで登場したのは、宮本百合子の二つの庭で、これは常識的読書傾向といへ様。

雑誌については、通常手にするものとしたせいもあるが、経済方面の雑誌は少く、評論、朝日評論が二、三あげられ、人間と展望が一番多く読まれているらしく、最近太宰追悼で人目をひいた、新潮、群像が次に、そして更に主体性の問題とタイアップしてか、個性が読まれるあたり、雑誌も又、思索的なものが好まれる様である。

以上は三年生の場合であるが、二年の場合余程、リーダーズ・ダイジェストの宣伝がきいたのか、アメリカを知りたいといふ欲望が強く働くのか、これが一番多く、英語青年□専門雑誌が手にされるのは、英文科気質を現はしている様にも思はれる。

この読書調査に際して、読書は好まぬとか、あまり読まぬとか、記載していないのも相当あったが、これらの事実によって学生を、その性格的に分類して見ることも、興味深いことと思ふが、これは次号に廻すことにする。

即ち此の度の読書調査で得られたことは、時代と共に人々の意識が変遷して行く様に学生も又、思想的に、或方面に固められて行く過程に於て、一つの道を懸命に文学書から得る感銘を自己の感情と照合させて、そこに統一せる何ものかを見出すべく、努力するといふ傾向にあるといふことである。

今回は、「愛読する作品と作家東西古今を問わず」「好きな作品と作家戦後文壇に於いて」「通常手にする雑誌」に分けて調査が行われている。前回、両学年共に1位であったアン・ドレ・ジイドは3年生では消え、「愛読する作品と作家東西古今を問わず」において、ドス

トエフスキーの『罪と罰』が1位に、2年生ではトルストイの『復活』と同数でジイドの『狭き門』が残っている。『復活』は3年生においても同数の2位であがっている。またトルストイの『アンナ・カレーニナ』が3年生の3位に、2年生ではマーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』とレマルクの『凱旋門』が同数3位である。日本人では、有島武郎の『小さき者へ』『宣言』、芥川龍之介の『河童』、長塚節の『土』が同数であげられている。2年生では日本人の作家は見られない。

	三 年		二 年	
東 西 文 学 を 関 心 す る 作 家	ドストエフスキー トルストイ	罪と罰 カラマゾフの兄弟 復活 アンナ・カレーニナ	トルストイ アンドレ・ジイド マーガレット ミッチェル	復活 狭き門 風と共に去りぬ
	有島武郎 芥川龍之助 長塚節 スタンダール	小さき者へ 蒼鷺 河童 土	シヨニ レマルク ゲーテ	人と超人 凱旋門 ワイルベルト マイストンの証 第時代
	其他	10	其他	20
好 ま な 作 品 と 作 家 戦 後 文 壇 に 於 い て	太宰治 宮本百合子 阿田信二 下村湖人 其他	人間失格 斜陽 櫻桃 二つの庭 脱出 次郎物語	太宰治 宮本百合子 其他	人間失格 晩年 二つの庭
		16		13
通 常 手 に す る 雜 誌	辰人 個性新 女性批評 朝日新聞 群像 美少年 婦人画報 其他			
		10	リーダーズ・ダイジェスト 世評 文壇	10 5 5 2 2 1
		5	其他	15

今回はドストエフスキーやトルストイといったロシア文学が上位を占めているが、何かブームとなるような時代的背景のようなものがあつたのであろうか。ドストエフスキーについては、『新聞』第8号(1948年6月25日)に「ドストエフスキーのこと『罪と罰』をめぐる」という評論が掲載されている。書いている小林みのる氏については肩書きが記載されていないので不明であるが、読書調査と同じ時期に掲載されているということは、学生たちに何らかの影響を与えていた人物(講師の一人)かもしれない。

「好きな作品と作家戦後文壇に於いて」で圧倒的人気は太宰治で3年生、2年生共に1位であり、中でも『人間失格』は両者に共通している。3年生では『斜陽』『櫻桃』が、2年生では『晩年』が好まれている。次に宮本百合子の『二つの庭』が両学年に共通してあげられていることについて、「これは常識的読書傾向といへ様」と分析している。

太宰治はこの年の6月13日に入水自殺しており、同月の『新聞』第8号に「哀悼大宰治 冷静にして慈父の如く峻厳なる医学博士畑義雄先醒に此の心貧しき一篇を捧ぐ」と題した一文が掲載されている。書いているのは中島達夫氏で、肩書きは「東京文学の家同人、本校講師」とある。また読書調査が掲載されている『新聞』第11号には、「太宰治論 死闘に敗退せる太宰」と題し、中島淑恵（経済科3年）さんの文章が掲載されている。ちなみに中島淑恵さんは、同窓会初代会長の成田淑恵女史（故人）である。こうして見ると、太宰治については、自殺して間もない時期であること、中島達夫講師の影響もあったことは考えられなくはない。

雑誌については、文中の解説にもあるように3年生では、『展望』、『人間』が一番読まれており、太宰追悼で人目を引いた『新潮』、『群像』が次に、2年生では、『リーダーズ・ダイジェスト』が1位で、「宣伝がきいたのか、アメリカを知りたいという欲望が強いのか、また、『英語青年』という専門雑誌が手にされているのは、英文科気質を現わしている様にも思われる」と分析している。

### おわりに

「この読書調査に際して、読書は好まぬとか、あまり読まぬとか、記載していないのも相当あった」とあるように、当時においても現在と同じ様に読書嫌いな学生もいたようである。一方で第3号には「現代の様に書籍入手の困難な際にも学生の読書欲は愈々盛んなものがある。」として、古本屋や新本屋等での学生の様子が描かれている。また第11号では「物価改訂と共に、一昨年より高価ではあるが、相当量、数々の文学書が、各社をこぞって、重版、再販共に出版される様になった。（中略）文学書中の小説などは、やはり、貸借関係に於いて読まれてる模様であり如何に現今の学生が、経済的にしぼられているかが、案ぜられる。」とあるように、文学書の出版も盛んになってきているが、経済的面から学生間では回し読みがなされていたようだ。また、1回目と2回目の調査では、上位を占める作家に変化が見られる。このことについて、「学生が思想的にある方向に固められて行く過程において、統一した何かを見出すべく努力している傾向にある」という分析は的を射ているように思われる。

### 引用

- 『別府女専新聞』第2号 1947年8月
- 『別府女専新聞』第3号 1947年11月
- 『別府女専新聞』第8号 1948年6月
- 『別府女専新聞』第11号 1948年10月

（よしおか・よしのぶ 別府大学附属図書館）